

地下百万階、地獄のフロアでございます

宇月

一時的に大流行した某感染症が収束して、早五年。

俺は、死んだはずの友人と再会した。

「よう。一年ぶりか？」

八月の太陽が燦燦と照り付ける、正午の渋谷。人でごった返した交差点の人波から現れたのは、記憶と全く同じ「伊藤光」だった。

「……え？ どうして、おまえ——」

あり得ない出来事に、しばし脳がフリーズする。彼に双子の兄弟はいなかったはずだ。それにさっきの口ぶりは、本人でなければ辻褃が合わない。

昼の東京。その喧騒が遠のいていくのを感じる。何時しかそれは止み、この街には二人だけが残された。

改めて目の前の男を見る。俺と大して変わらない身長で、黄色く染めた髪は頭頂部から二、三センチだけ地毛の黒色が見える。切れ長の瞳と、すつと通った鼻筋。整った顔が浮かべる薄い笑みは、間違いなく彼そのものだった。

「あの後、運よく脱出することができてさ。まあ、割と重めの怪我を負っちゃったから入院することにはなったけど」

そう言ってこちらに近づいてくる光に、思わず後ずさる。こういった状況では普通、涙ながらに再会を喜び合う

ものだ。しかし、そうできない理由が俺にはある。

彼が伊藤光だと確信した時、胸の内に湧き上がった感情は安堵や、喜びの類ではなかった。その感情は、恐怖。

俺は彼が恐ろしくてたまらなかった。

彼は、俺が殺した筈なのだから。

あいつはそう、狂人だった。

サイコパスだとか、そういうんじゃない。いわば、「無敵の人」ってやつだったように思う。

茨城県某所。山中の旅館に、俺と光は宿泊していた。なんでも近くに有名な心霊スポットがあるらしく、それを目当てに夏休みを利用した小旅行中だったのだ。

事は午後六時。食堂で他の宿泊客と食事をとっていた時に起こった。

ガラガラツと乱暴に扉が開け放たれる。

何事かと視線を向けると、そこには夏だというのに分厚いコートを着込んだ中年の男が立っていた。三十代後半くらいだろうか。やせ型で、生気のない表情からは重度の精神的疲労が見て取れる。

だが特徴的なのは目だ。まともな人間のそれじゃない。やけにギラギラした目玉が、今にも飛び出さんばかりに見開かれているのだ。

異常を感じ取り、困惑して騒めきだす面々。——



たちを地下一階へ誘導した。この宿の地下はイベントスペースとなっており、思った以上に広い。

従業員を含めた全員がその床にうつ伏せになるよう指示され、次いで両手を頭の上に置くように言われる。

その様子をしばらく眺めていた男は、急に腕を広げると、歌うようにしゃべり始めた。

「レディース、アーンドジェントルマーン。今夜私がお見せするのは、世にも珍しい脱出ゲームです！ ルールは簡単。この中で一番早くあのエレベーターに乗って地下から脱出できた人だけが生き残れます」

男が指さした先には、さっき俺たちが乗せられてきたエレベーターがある。

「ただし、階段の使用は厳禁です。そして、エレベーターには一人しか乗れないこととします。このルールを破った方は即、死んでもらいますので悪しからず」  
何を言ってるんだ、こいつは。俺は心中で毒づきながらも必死で頭を回す。

——駄目だ。何も思いつかない。

足元からカタカタとした振動を感じる。視線を向けると、震えていたのは自身の足だった。

信じがたい出来事でマヒしていた恐怖心が、今になって体を侵食し始めたのだ。

——死にたくない

恐らくは生物として在るうえで最も強い本能。

ふと他の宿泊客を見ると、俺の心内に邪悪な何かが芽生え始めた。

他の客はほぼ全員初老の人間だ。こっちは大学二年。体力的には有利だ。本気を出せばまず間違いない先行できる。だが問題は——

隣で同じくうつ伏せになっている光を見る。

——何を考えているんだ俺は！

一瞬間をよぎった思考を慌てて振り払った俺は、顔を床に伏せた。

だがどうする？ もう一度視線を挙げて周囲を見回すと、ようやく事態を飲み込めたのか客達の間には嫌な緊張が生まれていた。俺と同じように周囲を見渡す人間の目には、言葉にできない冷たさがある。

そうだ。みんな自分の命が惜しい。

俺はある種の諦観を覚悟としてゴールへと顔を向けた。「さて。私が『start』と言ったら、皆さん走り出してください。フライングは即失格。見るだけじゃつまらないので、私は目についた人を片っ端から撃っていきましょ、お気を付けください」

やるしか、ないのか。俺はひそかに足に力を籠める。

ふと光と目があった。

——ああ、そうかよ。だったらこっちだって！

「start-」

その声と同時に跳ね起き、それこそ必死で足を動かす。

他の人達も走り出すが、案の定俺が先行する形だ。

ふと、背中に殺気を感じる。

すぐさま脇によけると、正面を走っていた男性が背中から血を噴き出して倒れるのが見えた。

無差別発砲が始まっているのだ。

次々と周りの人が倒れていく中、俺は一番乗りでエレベーターの前に辿り着く。

すぐさま呼び出しボタンを押し、近くの死体の下に伏せた。後は待つだけだ。

素早く周りの状況を確認すると、光が足を引きずりながらエレベーターの手前に迫っている。

「クソガッ」

折角一番乗りだというのに、このままではそれを台無しにされてしまう。

俺は即、彼に躍りかかった。

胸元を掴み、力任せに投げ飛ばす。体勢を崩した光に馬乗りになると、硬く握ったこぶしをそのやわらかい頬に叩き込んだ。

「ぐあ やめるっ、何するんだ」

抵抗する光を抑え込んで、もう一度こぶしを叩き込む。横目に男が銃口をこちらに向けてるのが見えたため、俺はそのまま光の体を持ち上げて盾にした。

ああああああああああああああああああああ!!

立て続けに六発、光の体に弾丸が撃ち込まれるのを感じる。

弾丸を再装填しようとする様子から、今のあいつはもう弾切れの筈だ。俺はここぞとばかりに光の体を振り払うと、ちょうど到着したエレベーターの中に転がり込んだ。

体を起こし「閉」ボタンを連打する。

「閉まれ、早く閉まれよおおおおお」

扉が閉まり始めると、男がにやつきながらこちらを眺めているのが見えた。どうやら迫撃するつもりはないらしい。安堵して壁に体を預ける。

助かった。俺は生き残った。

ドアが閉まる、寸前。

ガシッ

誰かが足を掴んできた。

ぎよつとして足元を見ると、扉の隙間から腕が伸びてきて足首を掴んでいる。

ガジャ ガジャ

閉まる扉を拒むように、もう片方の手が扉を掴む。全装置が作動して開いたその先にいたのは、どす黒い血液で体中が染まった光だった。

「なあああああ お れら ともだ ちだよなああ なんだ こんな ことするんだよ なああ なあああああ

なあああああ



席に着くと、正面の窓からは晴れた東京の景色が一望できた。

駅前のビル。その五階にある喫茶店。頻繁に通っている部類の店ではあるが、光とこうして来るのは初めてだ。外がかなり暑いからか、冷房がよく聞いている。だがこの肌寒さは決してそれだけのものじゃないだろう。

「さて、どこから話したものか」

正面に腰を下ろした光は、そう言つて口に水を含んだ。俺はなんだか気が進まず、メニューを手に取つて彼の前に差し出す。

「何か注文してからでいいだろ。急いでるわけじゃないんだ」

光は一瞥した後それを受け取り、うなづく。

「あ、ああ。それもそうだ」

俺たちは互いに一つずつ飲み物を注文し、メニューを店員に返した。

しばしの沈黙。

口を開きかけた光を制すように俺は謝罪の言葉を口にした。

「今更何も言える立場じゃないのはわかつてる」

口を閉じた光は、静かに僕を見つめる。ああ言つていたものの、実のところ彼がどう思っているのか。それはわからない。でも、いや、だからこそ、今の気持ちは包み

隠さず話したいと思つた。俯きながら続ける。

「言い訳じゃないけど、あの時の俺はどうかしてた。友達を犠牲に、生き残ろうなんて」

次第に感情に抑えが効かなくなつてきて、唇をかむ。そんな俺の肩に、彼はゆつくりと手を伸ばした。

「……いいんだ。さつきも言つたけど、俺だつてそうしてたかもしれない。あの時は恐怖で何も考えられなかつただけさ」

顔を上げると、いつもの薄い笑みと目が合う。

その表情に憎悪といった負の感情は感じない。

赦してくれたんだ、光は。あの残酷な仕打ちを。あの惨たらしい言葉の数々を。

心を覆っていた氷が徐々に融けつつあるのを感じる。

溶けたその温かい水は、涙となつて頬を伝つた。

「ごめん。本当に、ごめんなさい」

溢れだす涙を拭いもせず、ただその言葉を繰り返す。

「いいんだ。君がそう言つてくれたおかげで、心のつかえがとれたよ。負い目を感じることもなくていい。戻ろう、友達に」

その後しばらく昔話を堪能した俺たちは、ここから場所を変えることにした。

「この近くにいい店がある。酒はもう飲めるんだよね？」

光はそう言いながら席を立ち、身支度を始める。俺は伝票を片手に二つ返事で応じた。

「ああ。今夜はごちそうさせてくれ」

「まじか、ごちそうさん」

会計を済ませて喫茶店前のエレベーターへ足を進める。光は顔をこっちにに向けて

「そういえば、歩きだったよな。地下に車が止めてあるから乗ってけよ」

そう言つて降下ボタンを押した。

「そうなのか。助かるよ」

俺は軽く礼を言つて、エレベーターが止まっている階層を見ようと上を向く。

「——あれ？」

パチパチと目を強めに瞑り、目をこする。多分、眼が霞んだか見違いだろう。

少し経つてエレベーターの到着を知らせるベルが鳴る。

ガコンと扉が開くと、

「さ、行こうか」

光はそう言つて俺の肩に腕を回した。

いい年した男二人がこんなことをするのに少しばかりの羞恥を覚えたが、彼との和解がそれを許容させた。足を進めようと正面に目を向ける。

「…………ごめん、光。用事を思い出した」  
俯きながら言葉を絞り出す。

「へえ。なんの？」

声のトーンは変わらぬに光が訊いてきた。俯いていても隣で彼がいつもの薄い笑みを浮かべたのが分かる。俺は震えそうになる声を必死に誤魔化して答えた。

「とにかく、一緒には行けない。ごめん」

そう言つて踵を返す俺を、光は肩にまわした手に力を入れて押しとどめた。

「おい、待てよ」

笑いを含んだ声。

「ちよつとくらい寄り道してもいいだろ？ 『みんな』も待てる」

俺の肩を掴む力は信じられないほど強く、振り払おうにもそれができない。鈍い痛みと苦悶の表情が浮かぶ。だが屈するわけにはいかない。俺は今更確信した。こいつはやっぱり「光」だ。俺があの時殺した友人だ。

逃げなければ。あの中に入つてはいけない。

中から漂つてくる死臭と煙の臭い

チカチカと点滅している電灯

床に広がる血だまり

あれは、あれはあの時の——

「嫌だ！ 俺はまだ『そっち』に行きたくない！」

拒絶の叫びをあげながら、周囲の人間に助けを求めよう

と辺りを見回す。

………いない

さっきまで賑わっていたはずの辺りには誰もいなくなっていた。そこには只々沈黙が広がっている。

「え？　なんで……」

信じられないような事実で頭が真っ白になりかける。しかし、強烈な危機感と恐怖がそれを抑え込んだ。あまりに現実離れた状態だからだろうか、パニックにはならず不思議と冷静な自分がいる。

助けが見込めない以上自身で逃げ切るしかない。光による拘束を振り払おうと彼に向き直る。

「——ッ!!」

そこで目にしたものに俺は絶句した。

ぬらぬらとした赤黒い顔。その半分は焼け焦げたかのようにボロボロで原形をとどめていない。焦げた側の頬の肉は焼け落ち、歯が見えている。目はまるで焼き魚のように白濁し、収縮していた。頭頂部のチリチリしたものは恐らく髪の毛の残骸だろう。

そこには先程の光の面影などなかった。

「なアあ、あ……　酷　イ　有様ダろ？　オマエ　に

盾に　さレ　た後　奴　が建物　に火を　つけてこ、このざま　さ」

「あ、あ、あああ……」

この世のものではないその悍ましい姿を前にして、脳が完全にフリーズする。

「さあ、イ　こう　みんな　まってる」

光が、光だったモノが、もう片方の手をこちらに伸ばしてきた。彼の手も同様に焼けただれており、その臭いは視覚以上のグロテスクを感じさせる。

逃げなければ。そうは思っても足は恐怖に凍んで言うことを聞かない。

「詰み」の二文字が脳裏に浮かぶ。俺はたまらず庇う様に腕を前に出し、硬く目を瞑った。

いやだ、やめてくれ　やめろおおお——

「君、君！　どうしたのかね!!」

——　え？

初老の男性を思わせる声が入る。

恐る恐る目を開くとそこには光の姿はなく、六十代ほどの男性がこちらを心配そうに見ていた。辺りを見回すとさっきまで嘘のように静かだったフロアには大勢の人が騒めきながらこちらを見ている。



助かった、のか？

しばし呆然としてしていると、男性がこちらへ近づいてきて口を開いた。

「びっくりしてしまつたよ、エレベーターの前で突然叫びだすものだから。どこか悪いのかい？」

「え？ ひ、光はどこに……」

「光？ 何言ってるんだ、君は」

男性は訝しげに眉を顰める。

「お、俺と一緒にいた金髪の……」

その言葉に、男性の訝しげな表情は苦笑いに変つた。

「見た感じ君はずっと一人だつたけど。誰か、この子と一緒にいた金髪の子を見たか？」

その呼びかけに周囲の人間は首を横に振る。

幻、だつたのか？

再び呆然としていると、誰かが呼んだのだろう、エレベーターの到着を知らせる澄んだ音が鳴り響く。

開いた扉の先には、駅ビルのエレベーターの見なれた内装があるのみだ。

そうだ、きつと疲れてたんだ。最近暑いし、そういう非現実的な幻覚を見たつて言う事例もないわけじゃない。早く家に帰って休もう。

そう自分に言い聞かせ、深呼吸をする。

——でも、やっぱり光には悪いことをした。未だに墓参りにさえ行けていない。心のどこかでは彼への罪悪

感が拭えていなかったんだろう。それが今回表面化したんだとしたら……

「ごめんな、光」

自分でも聞こえないくらいの呟き。俺は今やっと過去に向き合える気がする。

「ちよつと、君。乗るのかい？」

エレベーターの中でさっきの男性が訊いてきた。丁度下りだったので、乗ることにする。

乗客は俺と男性の二人だけだったようなので、一階のボタンを押した後に「閉」ボタンで扉を閉めた。

ガコン

扉が閉まると共にエレベーターが動き出す。

階下に行くとき特有の浮き上がるような感覚。何故だか今回はそれが少し強い気がした。

男性が前の方にいるので、少し奥の方へ下がる。

少しして、扉の上にあるフロア表示を眺めていた男性が口を開いた。

「私にも、君くらいの子供がいてね。小さい頃は女房と一緒によくハイキングに行ったものだ」

老人特有の昔話だろうか。亡くなった祖父も昔話ばかりしていた。

「仲がよろしいんですね」

適当に相槌を打つ。悪いが正直面倒だった。

「ああ。大きくなってからはあまり会えなくなつてしま

つたが、よくバイトで稼いだお金で旅行のチケットを贈ってくれてたんだ」

「へえ、いいお子さんですね。私も見習わないと」

自慢話にうんざりしながらふと目をやると、男性の着ているスーツの背中部分に大きな染みができているのが見えた。

「あの、背中に染みが」

そう指摘すると

「それはいけない。言ってくれてありがとう」

男性は染みを確認しようと、ゆっくりとスーツの上着部分を脱ぐ。

「——え？」

思わず声が漏れ出る。

ワイシャツが、真っ赤だった。

上着の色が黒だからあまり目立たなかったのだろう。

血液だろうか？ 背中の中央に赤い斑点が三つ重なり合っ  
て、大きな染みとなっている。

おどろきのあまり硬直していると、変わらず扉の方に顔を向けながら男性が口を開いた。

「ああ、これかい？ 確か君が避けた弾が当たったんだ」

「あ——」  
記憶がフラッシュバックする。

確かに俺はあの時銃弾を避けて……

ガコン ガガガガガガガ

エレベーターが大きな揺れと共に悲鳴を上げる。

チカチカと数回電灯が点滅し、その後完全に消えた。暗闇の中、俺はパニックとなって扉の方へ突進する。

扉の隙間に指を食い込ませ力任せに引くも、びくともしなかった。

あああ、さっきの光は現実だったんだ。これは畏だったんだ。

もう遅いとどこかでは理解しながらも、恐怖がそれを押し流す。俺は何度も何度も体制を変えながら扉を引いた。

「開け！ 開いてくれえええええええ」

バチ バチ バチ

再び電灯が点滅し、エレベーター内を照らし始める。

ここは、もはや駅ビルのエレベーターの内装ではなかった。

一昔前の内装に黒く焦げ付いた壁。少し歪んだ扉。左手の壁にはべっとり赤黒いものが付着している。さっき光が俺を連れこもうとしていたものだ。

周囲に漂い始めた臭気が鼻をつく。生臭さと焦げ臭さの入り混じったそれに、思わず喉に胃液がせりあがってきた。

とっさに扉を掴んでいた左手を離し、口にあてる。

ベチャ――

肩に何かに触れる感覚。まるでたっぷり泥を塗った手を置かれたようなそれに、俺は叫び声すらあげられなかった。

「やっど、来てくれたね」  
光の声。

「生きている人間を無理やり連れ込むことはできないんだ。さっきは失敗しちゃったけど、今回は成功できてよかった」

エレベーターは下降していく。どこまでも、どこまでも。

「さあ、みんな待ってる」